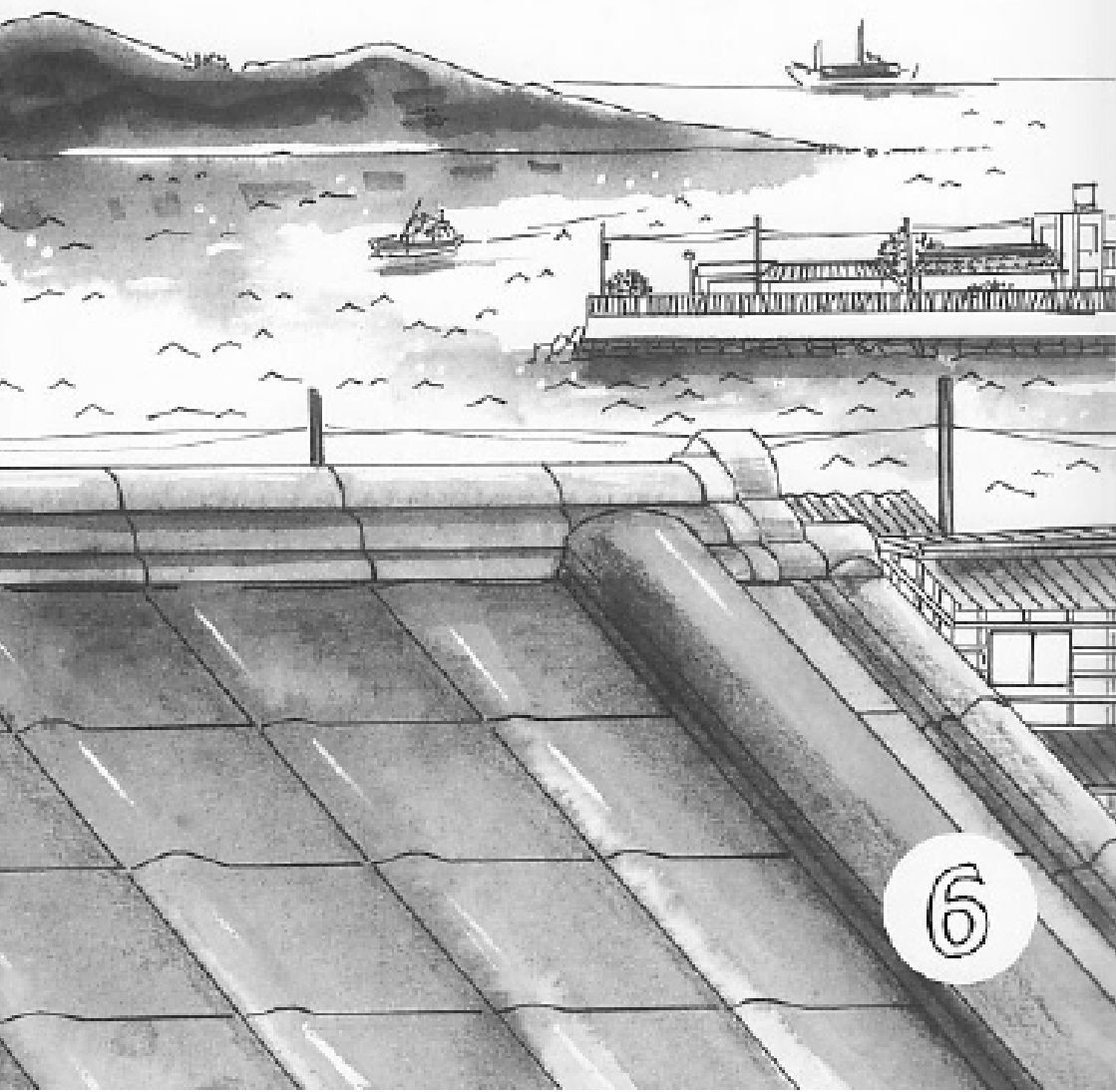


今刊2年6月1日発行(毎月5日1回発行)
第60巻4月号(通巻211号)

風土



6

筍を掘る終の日や友がらや

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)
この句には、「竹の子句会本年を以つて終る。外泊して庭を見れば」と前書があります。「竹の子句会」は、昭和三十九年の五月に桂郎師が七畳小屋で始めたものです。この句会は当時休刊していた「風土」を、再出発させるための記念の句会でした。桂郎の時代にいったん終わりましたが、その後復活し、現在も続いている「風土人」にとつて大事な句会です。この時、桂郎師は病氣療養の静岡の病院から、外泊許可をもらつて句会に臨んでいます。「終の日や友がらや」から、桂郎師の感慨が伝わってきます。

ねむ咲くや溺れる足の道に浮き

(句集『四温』より昭和四十八年作)
句集『四温』は、桂郎師亡きあと、子息の石川徹郎氏がまとめたものです。この句ができた頃は、病氣の繰り返しで体力的にも弱っていました。ねむの花はきれいなのですが、ぬかるみに足を取られて、思うように進めません。溺れる足の道に浮き」は、そのもどかしさをよく伝えています。

六月の人魚のなみだますほ貝

(句集『波の花』より平成十三年作)
器師はこの年に、丹後や若狭に旅をしています。敦賀まで足を延ばした器師は、「奥の細道」で芭蕉が立ち寄った種が浜の法花寺を訪ねています。「奥の細道」には「浪の間や小貝にまじる萩の塵」の句がありますが、ここにはもう一つ、「小萩ちれますほの小貝小盃」の芭蕉の句が残っています。芭蕉はこのあと大垣で「奥の細道」を結ぶ訳ですが、終わりに近づいていく寂しさが句に表れています。器師はその芭蕉の想いを汲んで、「人魚のなみだますほ貝」と詠みました。

待ちきれぬ妻が来てゐて明易し

(句集『波の花』より平成十三年作)
器師は平成八年に妻を失っています。ここでの「待ちきれぬ妻」は仏としての妻です。この句について器師は俳人協会の自註句集『神蔵器集』でこう述べています。「盆が近づくと何となく落ち着かない。待ちきれないのは私の方かも知れない。今朝初めてかなかなの声を聞いた。」亡き妻への想いの深さが伝わります。

酒 星 南 うみを

すみれ咲く頃の観音様に逢ふ
蜥蜴出づ落葉蹴ちらす音させて
舌先のふるへをまざと鳥の恋
酔眼に酒星五つ六つとも
つちふるや夏目雅子の青つむり
一本の畦の桜に媼座す
細枝を箸に作りて野がけの子
早立ちにむすびと香香嶺ざくら
大鍋に茶粥の噴いて飛花落花
朝ざくら発止はつしと的射抜き
花びらの洞に吸はるる虚子忌かな
ちちははのこゑにふり向く夕ざくら



竹間集

同人作品



春の日

山田暢子

ウイルスが地球を攻めに來たる春
「入学式」中止と記すカレンダー
学び舎へ一歩はすでに草萌ゆる
轉りにユニバーシティ・ハウスかな
今日よりは新しき日々風光る
マスク外すさくらを謳歌するために
子に未来祖母には春の明るき日

牡丹の芽

鈴木石花

初音聞く我より聡き夫の耳
誰も明日を知らぬ身なるに西行忌
大輪になる魁や牡丹の芽
振り仮名付き鱈のメニュー頼みけり
足早の受験生交ふ聖橋
七十年経し合唱に新入生
スイートピー―新曲暗譜繰返す

花行脚

岩木茂

啓蟄のシャツより手出て首の出で
やどかりの脱ぎたる殻を波攫ふ
鳥雲に組まるる四手網櫓
花辛夷処女湖は翠深めたる
菜の花は蝶に山頭火は旅に
灯台となる一本の島桜
吉野から高野へ入りぬ花行脚

牡丹雪

小林輝子

春雪と思ひしが屋根白無垢に
厩堆肥まやごえ曳くこともなく櫛藏ふかな
忘れずに薬の飲めた春の昼
段畑噴き出し過ぎし露のたう
和賀流の四十七忌や牡丹雪
渚には近づけぬ足菜の花忌
怖きほど辛夷の天の真つ青に

深海の色

田中佐知子

目の前に海ある暮らし若布干す
一竿は切り出しの竹若布干す
干若布滴は雪を穿つなり
若布干す村を法事の人ら過ぎ
艦影の近づいて来る若布干し
乾くほどに深海の色干若布
乾きたる若布は風の軽さにて

名残りの雪

田村すゝむ

雪同志ぶつつからずに降りて来る
車椅子降りて名残りの雪を踏む
胸中を埋めつくして別れ雪
柿若葉まだ字が書いて今日のあり
下駄履いて別れの雪を踏みになる
これはこれは花を隠して雪となり
安曇野の空雪形の蝶残す

みすずかる

中村洋子

みすずかる信濃の山に囀れり
風音も仏のこゑの彼岸かな
鳥帰る湖北を守る観世音
鷹化して鳩となり声立て直す
梅東風やひとつに揃ふ巫女の足
啓蟄や地図の折り目の山と谷
卒業式鬼先生の目に涙

鐘 臙

橋添やよひ

草の芽に日差しひとしきあしたかな
開門の鐘の臙や大伽藍
通り抜け自在の伽藍いたちぐさ
春の雨塔頭つなぐ石畳
方除けの神を祀りて梅の宮
鳥引くや水平線までがらんどろ
卒業^{孫娘}や飛び級の子の藍袴

抱卵期

浅田光代

建礼門しんと御苑の抱卵期
絵手紙を抱き春風のポストまで
丁字の香残し売家となりにけり
ひとところ花菜明りに鶴殿原
みささぎへ小舟漕ぎ出す霞かな
射的屋のまると煎餅日の永し
交番に男の子が一人蝶の昼

ミルククラウン

柿沼盟子

仏にも等しく供へ雛の膳
入り交じり話は尽きぬ卒業子
夕支度すませ外に出る遅日かな
雲吞をそろりと掬ふ鳥曇
我が北は向かひの南百千鳥
風光る午前で仕事切り上げて
一滴のミルククラウン春の昼

初 桜

門伝史会

初桜傘寿を迎ふ日々新た
強東風に背を押さるる万歩計
息かけて拭く手鏡や水温む
鳥帰るすらりと立ちし湖中句碑
樹木医の大きてのひら囀れり
聞き覚え無き囀りに目を凝らす
うららかや人真似ロボット動きだす

山河集

同人作品



南うみを選

鈴懸の幹の斑明かし春兆す
蓮鉢の水に映れり春の雲
くしゃくしゃに咲く角つこの八重椿
復路にて開ける景色山笑ふ
蠨螋の真中に何か守るもの

高橋まき子

オセアニア南十字や風涼し
ユウカリの山焼きつくしコアラ死す

島 玲子

夕涼や船上に聞く二胡の楽
春浅き聖堂に脱ぐ旅の帽
海のほか染むるものなし冬夕焼

東風吹くや仏を刻む鉋屑
春光に絵本見る子の産毛かな
囀りのたまる障子の内に居り

岡 尚

春泥にゆつくり走る宅配便
青き踏むせせらぎに沿ひ雲に沿ひ
飴細工の羽根ちよんちよんと鳥帰る
整列を教はる園児鳥帰る

岡本 尚子

豊国神社

秀吉の膝に遊びて雀の子
春疾風子象の硬き産毛かな
木屋町の図書館のカフェ春の雨

上村 葉子

ふらここや往きと帰りの違ふ風
鳥帰る東京湾を斜交ひに
春の灯の歳時記重し全五巻
囀やひら飼ひの鶏飛び跳ねて
鈍色の大利根春日泛かばせて

浅き春

小林輝子

波の花まとはりつきし磯羅漢
老人を淘汰せんとや流行風邪
磯波のたてがみ長し浅き春
きさらぎの海に背を向け松並木
三月の口の淋しや甘納豆
明かり消す雛のささやき聞かばやと
座禅草たがひ違ひに向き向きに
山村の絶滅危俱種入学児

鷹鳩と化す大福をつまむ夫
ビフテキを箸に食堂車の温し
外に出づること怠れば辛夷終ふ
川はさむ谷の深きに花辛夷
鮫角の灯台真白潮干潟
磯びらき媼の貌のそろひけり
小屋の跡母屋の跡と黄水仙
一人静飢餓羅漢の径つなぐ
分葱鰻播鉢のまま卓に出す
其処彼処黄蓮咲ける中尊寺
都忘れ祖母のおはぐる壺に挿す
うつし世を一気に離るさくらかな

風土独語／南 うみを



駅前の髭脱毛所鷹鳩に 岡本 尚子

「鷹鳩に」は正式には「鷹化して鳩と為る」で、七十二候でいえば「啓蟄」の二候の三月中旬に当たります。本意は鷹のような殺気がなくなり、鳩のようにやさしくなることです。寒さが和らぐのが基底にあります。それを草食系男子に重ねました。

囀りのたまる障子の内に居り 岡 尚

作者は春の光の届く障子の内にあり、庭から聞こえる「囀り」に耳を傾けています。途切れることない「囀り」がいつしか部屋を満たしていくように感じたのです。よい感性です。

梅東風や巨大注連縄ゆるびなく 森田 節子

「梅東風」は梅の花の咲く頃の春の先駆けの風です。この句は「巨大注連縄」から、天満宮の拝殿を想像します。冬の風雨にもめげず注連縄にゆるびは見られません。

ふらここや往きと帰りの違ふ風 上村 葉子

子供のころ「ぶらんこ」を漕いだ経験は誰にでもあります。作者はふと前に漕ぐ時と、後ろに漕ぐ時の風の当たり方に違いを感じました。確かに顔や胸に当たる空気と背中に当たる空気は感覚が違います。発見です。

海に鳶山にはとんび暖かや 根岸 善行

この句は「鳶」と「とんび」とを使い分けることで、その違いを伝えていきます。「海に鳶」は港に入る漁船の魚をかすめ取ったりして逞しいです。一方「山のとんび」は山田や畑の虫、また柿を啄んだりのんびりとした感があります。いずれにしても春です。どちらもゆつたりと大空に輪を書いて滑空を楽しんでいます。

蠨螋の真中に何か守るもの 高橋まき子

「蠨螋」は「まくなぎ」と言い、夏の夕べに野道を歩いていると、顔のあたりに付きます。この蠨螋の仲間が筒状に群れる習性があり、空中に揺れつつ筒の形を崩すことはありません。作者はその中で何かを守っているのだと直感したのです。

雛の顔むんずと摺む二歳かな 松本 胡桃

「むんず」とは急に力を入れて勢いつよくの意味があります。何んでも興味を示す二歳児が握りしめたのは「雛」の命と言え顔だったのです。はらはらどきどきなれど元気に万歳。佳きシャッターチャンスでした。

海のほか染むるものなし冬夕焼 島 玲子

一連の作品から作者はクルーズ船の旅をしています。島一つない太平洋のど真ん中でしょうか。冬の夕日に染まるのは海の他はありません。作者の体験を羨望の思いで想像します。

風土集



南うみを選

卒業の子より泣きたる母のをり 町田 松本 胡桃

折り紙のメダルを胸に卒園す
囀やふつくら焼けし卵焼き

雛の顔むんずと摺む二歳かな
春の夜をスワンボートの漂へり

山毛榉林を出でし小流れ芹を摘む 相模原 岡本 尚子

石英の煌めく流れ朝の芹
芹育つ水晶山の扇状地

鯉の名に昭和 大正水温む

駅前の髭脱毛所鷹鳩に 川崎 森田 節子

梅東風や巨大注連縄ゆるびなく

日矢射せる小島を浮かべ春の海

反り深き城の石垣水温む

千姫の間の衣ずれや春の暮

春の月瓦の漆光りして

白梅や一直線の男坂 上尾 根岸 善行

二月尽うるふ一日を持て余し
くぐもりを解き放ちたる初音かな

対岸の方が色濃し柳の芽
海に鳶山にはとんび暖かや

旅にありて海を見下ろす吊し雛 千葉 上村 葉子

鳥帰る髪染めること止めやうか
円墳の小山揺らしつ囀れり

白木蓮浮かぶ夜空に詩心

囀やひら飼ひの鶏跳びあがる 長岡京 南部 小花

春の宵タクト振る髭顎にまで

クリスマスローズ折りの傾ぎとも

震災の復旧しかと初つばめ

五輪聖火春の嵐に足留めに

東京オリンピック館